2014年3月1日

桜の聖母学院高等学校
平成25年度 第60回卒業証書授与式
式辞

桜の聖母学院中学校・高等学校
校長 伊達 幸子

3年生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。今年度は、英語科15名、普通科132名、計147名の皆さんが卒業証書を授与されました。

今、卒業式というこのよき日を迎えることができたことを感謝し、ここに至るまで、皆さんの努力はもとより、皆さんを支えてくださったご家族の皆様にも感謝申し上げます。

3年前の入学時、東日本大震災と原発事故

今から3年前の皆さんの入学の年は、東日本大震災を抜きには語れません。2011年4月は、大震災が発生してまだ1ヶ月にもならない時期でした。3月中旬に予定されていた終業式も離任式もできなかつたため、4月に入ってから行い、中学3年生の修了の集いの後、平成23年度第1学期の始業式を行いました。

そして、高等学校では、4月6日にリトライ試験を行い、午後から入学式が行われるという、変則的な日程でスタートいたしました。その後も余震が続き、交通網が麻痺しており、東電原子力発電所の事故による放射能の拡散が懸念される中、1週間にわたって、生徒は自宅学習となり、新学期の授業が開始されたのは、4月15日のことでした。

しばらくしてから、中合デパートの制服売り場の方から、震災の時にはデパートの施設そのものも大変でしたが、桜の聖母の生徒のために、特別に配慮して制服を縫製し、入学式に間に合うようにしていただいたというお話を伺って、心から感謝いたしました。また、皆さんの中には震災で自宅に被害を受けた卒業生もあり、大震災後、故郷を離れて福島市に移り住み、慣れない環境の中で生活し、桜の聖母学院で3年間勉学や部活動に励み、今、こうして、皆さんとそろって卒業式という節目を迎え、新たな出発点に立てることを嬉しく思います。

使徒パウロのフィリピの教会への手紙

さて、今日読まれた聖書の箇所は、聖パウロによるフィリピの教会に宛てら

れた手紙の一部分です。このとき、パウロ自身は、投獄されていて、獄中から書かれた手紙として知られています。おそらく年代は紀元 60 年から 63 年くらいの間であろうといわれています。

使徒パウロは、シラス、テモテ、ルカと共に、第 2 回目の伝道旅行の際に、この町フィリピに短期間でしたが滞在しました。

当時キリスト教に対する迫害が強かったにもかかわらず、パウロは恐れることなくエパフロディテという協力者にゆだねてこの手紙をフィリピの教会に送りました。

このフィリピ書の特徴は、迫害の中にあってもこのイエス・キリストを信じることがどんなにか喜びであり、平安であり、恵みであるか、ということを確認するところにあります。

フィリピの教会の人々は献身的で、献金も多くささげて、パウロの宣教活動を応援していました。唯一つ問題があったのは、フィリピ教会には、一致がかけていた、ということでした。性格や考え方の違う人と力を合わせてゆく一つのヒントが示されています。自分の思いをいったん脇において、へりくだって、相手の人を尊敬し、自分のことだけでなく、相手の人を中心に考えなさいということです。

マンデラ元大統領の死去

聖パウロが牢獄に投獄されていながら、様々な教会の信徒に対して、励ましの手紙を書き続けたように、世界の歴史の中には、自由を制限された状況下でも、自由を求めて、勇敢に戦い続けた人々がいます。これから紹介する南アフリカのネルソン・マンデラ元大統領もその一人でしょう。

日本では、「秘密保護法案が成立」というニュースが 2013 年 12 月 7 日の紙面のトップ記事で報じられていましたが、その同じ紙面の左下に、顔写真付きの 4 段の記事で、「マンデラ元大統領死去」の知らせが報じられていました。

ネルソン・マンデラ元大統領は、南アフリカ共和国での反アパルトヘイト（人種隔離）闘争の元指導者でノーベル平和賞受賞者です。95 歳でした。

一割に満たない白人が黒人を数百年間支配し差別し続けていた、南アフリカを解放した偉大なリーダーでした。

マンデラ氏は、大学生のとき、黒人の権利を広く認めるように訴えるアフリカ民族会議（ANC）に参加し、運動の先頭に立って闘い、1962 年に逮捕されました。1964 年には国家反逆罪で終身刑となり、大西洋に浮かぶロベン島に収監され、その後、ケープタウン郊外のポルスモア刑務所に移管され、獄中生活は

27年間に及びました。

自由も奪われ、環境も劣悪な中で、マンデラ氏を支えたのは何だったのでしょうか。

ANCのメンバーや妻が面会に来てくれることもありました。しかし、獄中にあるマンデラ氏にとってつらかったのは、手紙も自由にやり取りできなかったことや、病気の母親、兄弟姉妹が今どうしているのか知りたくても、情報が限られていることでした。

彼自身は、体格の良い人物でしたが、獄中生活の中で結核をはじめとする呼吸器疾患になり、石灰石採掘場での重労働によって目を痛めました。

こうした困難の中にありながら、彼自身の考えと行動でまわりに影響を与えていったことがありました。その一つは、獄中の囚人を監視する刑務官のほとんどは白人でしたが、彼らの使用するアフリカンス語を彼は覚え、少しずつ彼らとの心の壁を乗り越えていったのでした。

さらに、収監中にも勉学を続け、1989年には、南アフリカ大学の通信制課程を修了し法学士号を取得しました。マンデラ氏は、白人中心の政府に差別をなくすように働きかける運動を刑務所の中から指揮しました。

その毅然とした姿は、人種や国境を越えて支持され、アパルトヘイトがなくなった後の1993年、白人政権のデクラーク大統領とともにノーベル平和賞を受賞しました。

1994年4月に南アフリカ史上初の全人種参加選挙が行われ、アフリカ民族会議は勝利し、ネルソンは大統領に就任しました。

普通であればその後、報復、かたき討ちが連鎖的に繰り返されることになり、南アフリカの内戦となってすべての人が不幸になるところでした。しかし、マンデラ氏は、「この美しい国で、二度と再び、人が人を抑圧するようなことがあってはならない」と語り、黒人たちに「白人をゆるそう」と説き続け、和解の政治を推し進めたのです。

旧約時代の考えなら「目には目を、歯には歯を」という発想だったところを、「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈る」ことを実践した偉大なリーダーでした。

2009年、アメリカでマンデラ氏の自伝的映画 *Invictus*（負けざる者たち）が製作されました。もともとラテン語で、英語では *unconquered*（征服されていない、不屈の、負かされていない）という意味です。

この中で、マンデラ氏が繰り返し述べた言葉が、“I am the captain of my soul” という言葉です。「私は、私の魂の指揮官である」という意味です。この言葉は、もともとはイギリスの詩人、ウィリアム・アーネスト・ヘンリー (William Ernest

Henley) の *Invictus* という詩からの引用です。

ヘンリー自身、12歳で、骨の結核 (*tuberculosis of the bone*) になり、症状が悪化し、片足を切断しなければならないという逆境にありながら、不屈の精神ですべてを乗り越え、前向きに生き、1875年にエジンバラの結核病棟にいるときに書き上げ、1888年に発表した詩集に *Invictus* という詩が収められました。

南アフリカのマンデラ氏が27年間獄中にいたとき、*I am the master of my fate, I am the captain of my soul.* の詩を彼自身も、まわりの囚人たちもこの詩を愛読して、心の支えとしていたそうです。

自分の中にあるものは自分で変えることができる

聖パウロがフィリピ教会のためにどんな祈りをしているかということ、フィリピの人たちの「愛がますます豊かになるように」ということです。「愛」と訳されているギリシア語のアガペーという語は、「神の無限の愛」とか「神の無条件の愛」を意味しています。

知る力と見抜く力は、知恵や知識、判断力や識別する力ともいえるでしょう。特に、変えられることと変えられないことを見分ける力も大切です。そこで、変えられることと変えられないことを考えてみたいと思います。

人生の中で、どうしても変えられないもの。その代表は「過去」、そして、「他者」です。

何かを変えるパワーは、あなたの今この瞬間にあります。過去でも、未来でもありません。ですから、過去へのこだわりを捨てて、今を大事にしましょう。

「今何ができるか、何が変わえられるか」あなたが今考えるべきことは、これなのです。

わたしたちがいつでも自由自在に変えられるものは、私たち自身の中にあります。自分の態度、意見、信念、振る舞い、思考、言動、ものごとへの反応の仕方。どんな環境にあっても、私たち自身の中にあるこれらのものは、自分だけでいつでも変えることができます。過去がどうであろうとも、他人がどういおうと、それに対してどのように反応するか、感じるか、考えるか、それはあなた自身が決めることなのです。何かを変えるのはあなた自身です。その意味で、一人ひとりが *I am the captain of my soul.* なのです。

最後に、福島県民の一人として、関心を持っていることの一つは、原発の今後ですが、東電の福島第一原発の廃炉作業は、昨年11月に始まったところです。今後、30年から40年かかるといわれる廃炉作業の第一歩を踏み出したばかり

です。福島県に対する風評被害もまだ払拭されない現状にあって、わたしたちはいつまでも被害者意識を持ち続けるだけでなく、未来に対して、わたしは何ができるか、という視点を持って、知る力、見分ける力をつけて、賢明に判断しながら生きていきましょう。

間もなく桜の聖母学院を巣立って、新しい社会に羽ばたいていかれる皆さん、皆さんが新たに踏み出す世界には、新しい出会いや学び、発見、感動的なことがたくさん待ち受けていることと思います。どうぞ、それらの一つ一つを感謝して受け止め味わってください。

これまでに受けた様々な恵みに感謝しつつ、一人ひとりに与えられている賜物（人を思いやる心、感謝する心、向上心、謙虚な心）をこれからも深め、成長させ、その賜物によって、周りの人々に喜びを配って行ってください。いつも、神様が必要な力、勇気、希望をお与えくださいますようお願い申し上げます。

保護者の皆様へのお礼

保護者の皆様、お子様のご卒業おめでとうございます。この3年間、あるいは、中学高校の6年間、日常の生活や学習、精神面にもご支援をいただき、誠にありがとうございました。保護者の皆様のおかげで、本日、晴れの卒業式を迎えられましたことを感謝し、巣立っていく卒業生と保護者の皆様のうえにも神様の豊かな祝福がありますようお願いいたします。皆様とは一旦、ここでお別れとはなりますが、精神的なつながりはこれからも続きます。在学中にいただいた変わらぬご支援を桜の聖母学院にお寄せくださいますようお願い申し上げます、式辞といたします。

参考資料

朝日新聞 2013年12月7日付

“Long way to Freedom”, Nelson Mandela, BACK BAY BOOKS

『アフリカレポート、ネルソン・マンデラ、その人生と遺産。和解の政治家、ネルソン・マンデラ』（平野克己、アフリカレポート2014年 No.52、pp.10-14）

http://d-arch.ide.go.jp/idedp/ZAF/ZAF201400_313.pdf

『自分らしくライフバランスを手に入れる』（小倉美紀、ファーストプレス）

<http://www.experienceproject.com/stories/Love-Inspirational-Poems-And-Quotes>

<http://en.wikipedia.org/wiki/Invictus>

<http://life-engineering.com/1935/i-am-the-master-of-my-fate-invictus>

Invictus の詩 (William Ernest Henley)

<p>Out of the night that covers me, Black as the pit from pole to pole, I thank whatever gods may be For my unconquerable soul.</p>	<p>私を覆う漆黒の夜 鉄格子にひそむ奈落の闇の中から 私はあらゆる神に感謝する わが魂が不屈のものであることを</p>
<p>In the fell clutch of circumstance I have not winced nor cried aloud, Under the bludgeoning of chance My head is bloody, but unbowed.</p>	<p>無残な状況におかれていても 私はひるむことなく大声で叫ぶこともして きていない 運命に打ちのめされても 血まみれになっても、決して屈服はしない</p>
<p>Beyond this place of wrath and tears Looms but the horror of the shade, And yet the menace of the years Finds, and shall find me, unafraid.</p>	<p>激しい怒りと涙のかなたに 恐ろしい詩の恐怖が浮かび上がる 長きにわたる脅しを受けてなお 私は何ひとつ恐れはしない</p>
<p>It matters not how strait the gate, How charged with punishments the scroll, I am the master of my fate: I am the captain of my soul.</p>	<p>門がいかに狭かろうと いかなる罰に苦しめられようとかまわない 私わが運命の支配者 私わが魂の指揮官なのだ。</p>